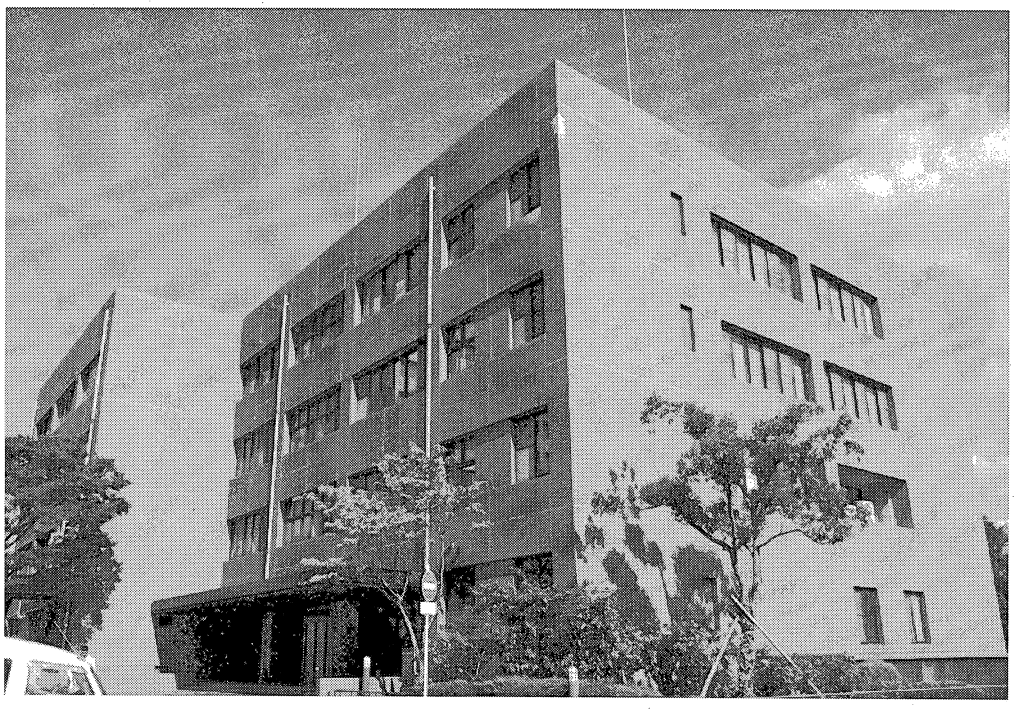
１．大阪大学文書館設置準備室



文書館設置準備室のある箕面キャンパス管理棟

基本データ

開設年月日：2006 年 7 月 1 日

所在地：〒562-8558　大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1　管理棟　1 階

HP アドレス：

http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/facilities/ed_support/archives_room

刊行物：『大阪大学文書館設置準備室だより』ほか

所蔵資料点数：約 20,000 点

専任職員：講師 1 名

調査日　2011 年 9 月 6 日

場所　　大阪大学　文書館設置準備室

お話しいただいた方　文書館設置準備室長　　阿部武司氏

文書館設置準備室講師　菅真城氏

調査者　　稲葉浩幸、上崎哉（記録）

鈴木拓也（写真）、藪下信幸

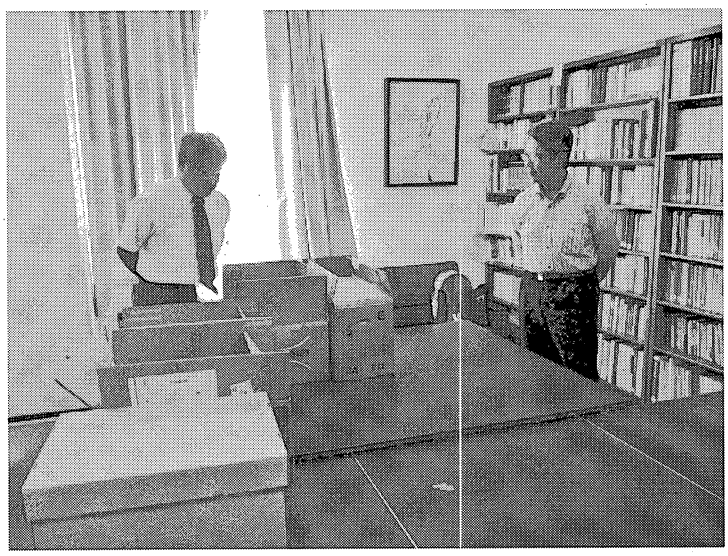
1. 大阪大学における大学アーカイヴズについて

1-1　設置目的・経緯―ポスト年史編纂ではない大学アーカイヴズ―

菅真城氏の言葉によれば、大阪大学の大学アーカイヴズの特徴は、ポスト年史編纂ではない点にあるとされている。だが、大阪大学において全く年史編纂がなされてこなかったわけではない。なかでも、1979～1985 年にかけて行われた 50 年史編纂事業は最も本格的なものだったとされている。ところが、編纂終了後関係者が熱望したにもかかわらず、「大学史資料館」あるいは「大学史資料センター」の設置が実現することはなかった。

その後も、特に 50 年史編纂事業に携わった教員を中心に資料散逸に対する憂慮の声が上がったことから、大学文書館設置の要望が、阿部武司氏を通じて当時の総長及び副学長に対して行われた。こうした要望に対し、2001 年の情報公開法施行や、旧 7 帝大の中で大学アーカイヴズを設置していないのは大阪大学だけということもあり、大学当局は好意的な反応を示した。2005 年に大阪大学総合計画室の下に文書館（仮称）設置ワーキングが設けられたのである。そして、このワーキングにおいて約 1 年に及ぶ審議を経て、2006 年 2 月 10 日に「大阪大学文書館（仮称）設置第二次答申」が出され、2006 年 7 月 1 日に文書館設置準備室が設置される運びとなった。

その後、文書館設置までの道のりは決して平たんなものではないが、その理由としては、スペースの確保が困難なことに加え、職員等の人事異動の度に再度説明する必要性が生じるということが挙げられていた。また、文書館設置に対する理解については、文系の教員の場合には自分に関心のある資料を残したがる傾向があるといったことがあるのに対して、理系の教員は論理的な説明に基づく納得を得る必要性があるとのことであった。



調査風景

1-2　組織形態

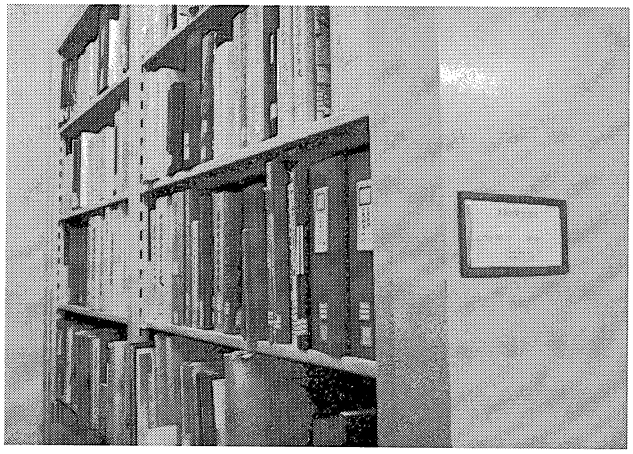
大阪大学では、現在のところまだ文書館設置準備室の段階である。このためその陣容は、

阿部室長と菅氏に事務補佐員 2 名を加えたものであったが、今年度より大学の部長クラスの退職者の嘱託職員が加わった。

運営に当たっては、傷みやすい資料の保管等に経費が必要であるが、当初よりも予算が削減されているのも課題となっている。

1-3　活動内容　―法人文書の収集整理を中心に―

まず、博物館と図書館との関係における公文書館の位置づけであるが、博物館が標本等の収集・整理、図書館が公刊された書籍の整理といった役割を期待されているのに対し、公文書館は法人文書の整理・保存・公開にあたるとされている。とりわけ、後世に残すべきものと廃棄すべき文書の選別が重要であり、将来的には 5～10%程度残すことを予定しているとされている。



書庫

ただし、現在のところ公文書管理法の指定を受けた機関として位置づけられていないので、直接こうした役割を果たすことはできず、各部署に捨てずに残すよう求めているに過ぎないとのことであった。また、将来的に収集整理に当たるようになった時点では、京大方式ではなく、広島大学のように現地で選別することになるであろうとのことであった。

これ以外にも、大阪大学の歴史に関する資料の収集整理を行っており、万葉旅行之会等の学生団体に関する資料の寄贈が OB からなされている。現在のところ、こうして収集された 2 万点ほどの資料や文書が保管されている。

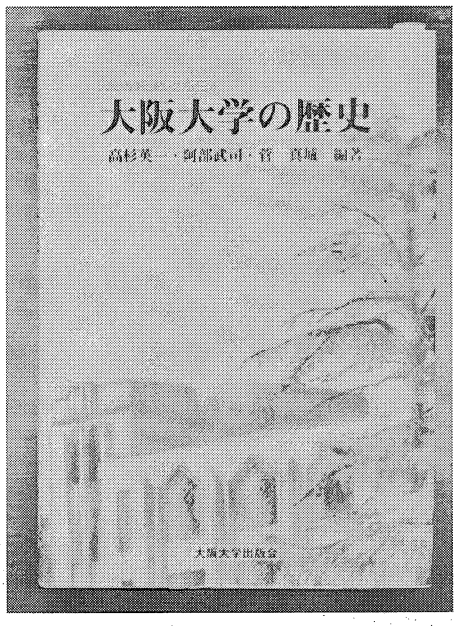
次に収集整理された文書の利用であるが、まだ準備室の段階であるので一般公開はされておらず、認知度も低くまさに知っている人が利用している状況である。利用者としては、まず歴史研究者が一次資料を求めてというケースがあるようである。次に、事務職員の利用は現在のところそれほど多くはないとのことであった。また、一般利用については、電話での問い合わせが多く、マスコミによる問い合わせも相当数あるとのことであった。

一方、展示であるが、常設展示については予定されておらず、阪大の歴史については基本的に博物館が担当するということであった。その理由の一つとして、展示にふさわしい文書がそれほどないということが挙げられていた。

また、『大阪大学の歴史』と題する自校史教育が菅氏着任以前から行われており、1～2 年生中心、半期、オムニバス形式（7～8 名）のもので、100～200 名の受講生がいるとのこと

であった。さらに、この講義のためのテキストとして、2009年には高杉英一氏・阿部武司氏・菅真城氏によって『大阪大学の歴史』が編纂されている。

さらに、名誉教授のインタビューをビデオ撮影し、現時点では紀要に活字として刊行するという試みも行われている。現在は、年に5～7件が収録されており、将来的には文書館の活動の一つになるであろうとのことである。



自校史教育テキスト
『大阪大学の歴史』

２．大阪大学及び私立大学にとっての大学アーカイヴズの意義
―大学のアイデンティティ確立に向けて―

大学アーカイヴズの意義としては、第一に大学のアイデンティティの確立にあるとのことであり、この点、国立大学も私立大学も接近する方向にあるであろうとのことであった。特に大阪大学の場合には昭和６年に府と民間の出資によって設立された、言ってみれば官民協働の大学という歴史を持っており、こうした歴史を確認するという意味でも大学アーカイヴズの意義があるとのことであった。またさらに、こうした活動は単に在学生や教職員にとって価値があるのみならず、校友との関係において重要性があるとのことであった。

また、私立大学にとっての大学アーカイヴズの意義については、中小規模の国立大学における公文書館設置が難しい中で、私立大学もまた公的責任を担っており、社会に対する説明責任を果たすという意味でも設置が望ましいとのことであった。

調査を振り返って

大学アーカイヴズ設置においてまだ基礎的研究に着手したに過ぎない近畿大学に所属する教員として、準備室が設置されてから未だに公文書館設置に至っていない大阪大学で聞かせていただいた内容は大いに参考になるものであった。同様のことは他大学、特に広島大学でのヒアリングの際にも聞くことができたが、いかにして大学アーカイヴズの意義や必要性を学内で理解してもらうかが一つの鍵になることは確かなようである。本学においても、FD研究集会等の機会を利用するだけでなく、事務職員等を巻き込んだ形での活動が一層必要になっていくであろうと感じた次第である。　（上崎哉）